

演心力～広げよう演劇の輪～

講評速報 8号

12月25日(水)

【愛知】

滝高等学校

先生、バナナはおやつに含まれますか？

物語の舞台は、ありふれた中学校の職員室。遠足の前日、一人の真面目な生徒が先生に奇妙な質問をした。「先生、バナナはおやつに含まれますか？」

舞台装置については、黄色と緑のパネルはバナナに見え、それに対して後ろに置かれていた赤茶色のパネルが腐ったバナナにも見えるという意見があった。腐ったバナナというのは、クラスの後ろ暗い部分だと感じた。サラダやバナナチップスなどを着ぐるみを着た役者で表現することによって、言葉だけでは伝わりづらい説明がわかりやすくなっており、視覚的にも楽しめた。

物語のはじめ、ポップな曲に合わせたダンスがあり、そこから先生たちのコメディ調の掛け合いが始まったことで明るい印象を受けた。しかし、劇が進むにつれ照明がだんだん暗くなっていくことで、大場の発した質問に対する疑惑や違和感が徐々に大きくなり、観客を不安に駆り立てる表現がなされていた。

生徒の本性が暴かれたシーンでは、最初と似たような曲が流されていたが、生徒の様子は最初とは全く違った統率のとれていない動きで、より強い衝撃を観客に与えた。最初は先生の先入観を通して見た生徒の姿を描き、最後の狂気を感じさせるように走り回る生徒の姿こそが彼らの真の姿なのではないかという意見も出た。劇中、何度も出てきた「バーナーナ」の声がだんだん低くなることにも言いようのない恐怖や不安を感じた。

私たちはこの劇を「先入観」についての問題提起だと考えた。「ルール次第で、世界は変わる」という台詞は、人間が自分本位に物事を見てしまうという先入観の本質を突いていると感じられた。先生が「中3はまだ子供よ」と何度も繰り返すことや、生徒から見た先生もステレオタイプであることが、身近に潜む問題であることを示していた。

話の展開とともに少しずつ明らかになる真実を、劇中の先生たちと同じように私たち観客も実際に体験させられたように思う。最後の場面で、「先生、バナナはおやつに含まれますか？」という冒頭と同じ問いを投げかけていたが、この問いに対して自分たちが持っていた最初のイメージは完全に崩されてしまった。特に、質問した大場さんと仲が良かった筈の女子生徒たちが実ははじめの中心人物だったことには恐怖を覚えた。

学校という身近な舞台で、クラスの間関係や先生と生徒の関係を軸に描くことで、近くても見えていないそれぞれの世界があるということを、改めて感じた作品だった。